

山本周五郎

新潮記

新潮文庫

新 潮 記

新潮文庫

や - 7 - 50



昭和六十年九月十五日 印刷
昭和六十年九月二十五日 発行

著 者 山本周五郎

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 一六二
東京都新宿区矢来町七一
業務部(〇三三二六六一五一)
電話 編集部(〇三三二六六一五四〇)
振替 東京四一八〇八番

定価はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社通信係宛ご送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

新潮文庫

新 潮 記

山本周五郎著



新 潮 社 版

3468

新
潮
記

風雪の中

一

嘉永五年五月はじめの或る日、駿河すまがのくに富士郡大宮村にある浅間神社せんげんの社前から、二人の旅装の青年が富士の登山口へと向っていった。参道を掃いていた宮守の老人がそれを見つけて、「もしもし」と呼び止めた。

「あなた方はお山へお登りかな」

「ああそうです」背丈の低い方の青年がふりかえって答えた、叱られるとでも思ったものか、人の好きそうな円い顔が赤くなった、「そうです、これから登ろうと思うんですがなにか御禁制でもあるんですか」

「べつに御禁制というほどのことはありませんが、おまえさん方はもうお山には馴なれておいでか」

「いや初めてですよ」

「剛力はお雇いでしような、荷を背負ったり道の案内をしたりする男です、下の宿でお雇いになったでしょう」

「それは、その、なんですか」

青年は困ったようにまします赤くなり、つれの方へ救いを求めるような眼を向けた。しかしつれの青年はまるでこっちの問答など聞えもしないようすで、片方の脚にからだの重みを支えながら、岳樺だけかんばの芽ぶきはじめたみずみずしい枝をうつりと見あげていた。

「で、それは、その、雇うきまりになつてゐるんですか、つまりその剛力というのを雇わないといけないことにでも」

宮守の老人は笑いだした。

「わたしはそんなことをいつてゐるのではないのです、お山開きは毎年六月で、そのまえにはよくお山が荒れるのです、朝のうちお天井まで晴れていても一刻とぎすると大風が吹きだす、ひと晩のうち五合目あたりまで雪のつもるようなことが、五月ちゆうにはよくあるのです、まったくのところお山開きまえの陽氣の変わりめは誰にも見当のつかぬことがあるのですからね、あなた方がもしお山になれていらつしやるか、剛力でもおつれにならぬかぎりは危のうございますよ、わたしはこう申上げたかつたわけです」

「ああ、それはどうも、どうも、それは御親切にありがとうございます、たしかにそのとおりでしょう、わたしもそれは聞いているのだが……」

「ほかの山とは違いますでな」老人は箒ほうきをつかいはじめながら云つた、「このお山ばかりは血氣にまかせて登るととりかえしのつかぬことになります、どうしてもお登りなら剛力を雇つておいでなされ、老人の云うことは背きいて損のゆかぬものです」

「まったく、いやたしかにそのとおりでしょう」

かれはまたちらとつれのほうへ眼をやった。それから老人を見た。もうひと言すすめて貰いたらしい。しかし老人は諄くは云わず、箒をつかいながら御手洗の方へと去っていった。するとそれを待っていたというように、つれの青年はしずかに、しかし大股のしつかりとした足どりで道を登りはじめた。

南東の微風のわたる道を、二人はずんずん登っていった。

背丈の高い方は武家であろう。腰に大小を差しているし、総髪にきゅっとひき詰めてむすんだ髪とびげんの横よこに面擦れの痕あとがある。かなりひと目を惹く顔だちで、むしろ美男といつてもいいくらいであるが、眼つきや唇くちもとになんとなく人を蔑さげすむような色がある。それが年齢が若いためと知りながら自分で抑えようとせず、ときには意識してそれをむきだしに示すのが、この青年の場合には「絶望せる人間」という印象を与える。かれは早水秀之進といい、讃岐さぬきの国高松藩の郷士こうしの子であった。

片ほうの背丈の低い若者は、おなじ高松の豪商、太橋市三郎の二男で大助という。年は秀之進より一つ上の二十三歳であるが、真底から兄事しているようすでなにごとくも秀之進の云うままだった、というよりも秀之進の考えることをすばやく察して、相手がなにも云わぬうちもつとにそのとおりにするという風だった。尤も多くの場合それは見当はずれになるのだったが、……かれはきわめて明るい気質で、口達者で、いつもなにか話していないと気の済まぬほうだった。豪商の子で金に不自由はなし、学問もできるし、人品も（少し背こそ低いが）なか

なか立派である。

「してみると」大助は息をつきながら、「してみると、つまり、どうでもわれわれは登るわけなんだな」

答えはなかった。

「わたしは構わないがね、わたしは大抵のことは凌いでゆける健康を持つてるが、早水さんはからだが細いからな、宿の者も云うし、あの宮守も云うし、山開きまえの危険な時期は避けたほうがいいと思うがな」

秀之進はやはりなんとも云わない。あたりの樹々は少しづつ様相を変えて、落葉松のいぶし銀のような芽ぶきがちらほら見えはじめてきた。坂道はしだいに急になる。黒い尖った鎔岩の砂粒が草鞋と足袋の間にはいつてあるきにくい。道をはさむ林は深くなってそよ風も通わなくなり、日光は雲ひとつない青空からじりじりと照りつける。郭公が一羽、よく響くこえで鳴きながら二人の頭上を低く飛び去った。

「富士へ登るのをはじめから目的にして来たのならこんなに諄くは云いたくないんだが、なにしろ急に思い立っただけだからな、おい富士へ登ろう、と仰しやる、よろしい登ろう、天気もいいし、せっかく通りかかったものだ、よしきたというわけだ、つまりそんな具合に簡単に考えていたんだから、これは少し乱暴だよ、むしろ無法だよ、だって宿の者も宮守の老人もあれほど云っているんだからな、え……なにか云ったかい」

「なにも云わないよ」

秀之進はしずかにそう答えた。

「それは結構、つまり、なにも仰しやらないというわけだ、文句はない、云うだけの値打もない、おい待って呉れ、ちよつと足袋の中の砂を払うから」

道は矮草帯へぬけ、さらに裸の砂と岩地にかかった。秀之進はずんずん登ってゆく。休みなしである。足どりはゆつくりしているがさすがに堪えるので、大助の饒舌もだんだん途切れだした。二合目へたどり着いたときには肉の厚い胸を苦しうに波うたせ、あたりを見まわしながら、「早水さん、ぜんたい富士山はどこへ行つちまったのかね」というのが精々だった。

二合目の岩屋でかれらは夕食をした。石の竈に備えつけの鍋で持って来た糰をもどし、干味噌をまぜた雑炊を作つて喰べた。そしてひと休みするとすぐにまた出発した。

夕食まえから山のまわりは密雲に閉ざされていたが、二合目の岩屋を出ると間もなく風が吹きはじめた。北東の寒冷な風だった。凜冽という文字のびたりはまるもので、皮膚をさき骨をさすかと思つた。さつきまでは登つていさえすれば温かかった。立ち停ると肌に粟が立つほど寒さを感じても、足を動かしているあいだは汗ばむくらいだった。しかし今はいくら足に力をこめて登りつづけても温かくなならない。気温はぐんぐん低くなる。踏みしめるたびに地面の凍つてるのが足の指から這い登ってくる。どうかするといま喰べたばかりの物が胃の中でちんと凍つてしまいそうにさえ思つた。

「……大さん」秀之進がふと気づいたように、「北風が吹くと寒いね」

「……………」

大助はあっけにとられた、それから急に腹が立ってきたらしい。

「へえ！ 寒いですか」と、がたがた震えながら云った、「これが寒いというんですか、冗談じゃない、あんたは実にいい人だがそれが悪いよ、そういう云い方はないと思うがね、北風が吹くと寒い、それは人をばかにすると云うものだよ」

「じゃ寒くないのかい」

「わたしは黙るよ」

本当にかれは黙った。言葉は胸にいっぱいにふくれあがっているのだが、疲れがひどかったし、口をきくだけからだの精力を消耗しそうな気がする。

——なに、早水だって人間だ、いつまでからだが続くものか、こうなれば意地くらべだ、そう思って登りつづけた。

風はいよいよ強くなり、やがてなにか顔に当たると思うと、それは粉のような雪だった。つまり宮守の老人の言葉が偶然にも事実になったのである。闇ぐみは濃く道は嶮けわしかった。尖った岩が突き出ている、うっかりすると爪先を痛める。寒気はますます厳しくなり、吹きしまく雪はたちまちからだの片がわに板を立てたように凍りつくのだった。

大助が少しずつ後れるのを気づかぬとみえ、秀之進は大股に、しっかりした足どりで登っていた。

八合目と思える岩屋へたどり着いたのは、あたりが微かに白み初める頃だった。

「腹を拵こしらえていこうか」

秀之進が云った。こんどは大助が答えなかった。実は答えようにも舌が動かなかったのである。秀之進は岩屋の入口へ下りていって、吹きつけた雪の凍りついている重い引戸をあけた。そして思わず眼を睜ひらった。岩屋の中の炉に赤々と火が燃えている。その火のそばに、今まで寝ていたのであろう、二人の人影が半身を起こしてこちらを見ていた。

「あとを閉めて呉れ大さん」

そう云って秀之進は炉端へ近寄っていった。挨拶をするつもりだったのである。すると半身を起こしていた一人が、掛けていた蒲団ふとんをはねたと思うと、いきなり刀を抜いてこっちの鼻先へつきつけながら叫んだ、「とうとう来たか」

「……………」

秀之進はじっと相手を見た。

「いつかは来ると覚悟はきめていた、命が惜しくて逃げていたのではない、時節の来るのを待っていたんだ、しかし嗅かぎだされた以上は逃げも隠れもせんぞ、斬れるなら斬ってみろ……藤尾、みぐるしいまねをするなよ」

「はい、生死とも兄上さまと御一緒でございます」

秀之進は驚いてそっちを見た。もう一人は女である。蒲団をはねて、手早く身ごしらえをする姿はまだごく若い娘だった。男のほうも二十三四だろう、病臥びょうがでもしていたとみえ、蒼白けた骨ばかりのからだつきである。眼は落ち窪くぼんでいるし、頬骨は高くとがっているし、ぜんたいに衰弱して吐く息は火のようだった。……いったいこの兄妹はどうして此処こゝにいるのだろう、山開きまえの、人の近寄らぬ富士の頂上へなんのために籠こもっていたのだろう、それよりもこんなに弱っている兄をどうして伴つれて登れたのか。秀之進はそんなことを考えながらじっと押し黙っていた。

「どうするんですか」大助がたまりかねて前へ出た、「いったいどういうわけです、あなた方はどなたです、われわれは今日、いや昨日ふいに思いたって此処へ登って来た者で、誰を捜しに来たのでもなし誰に恩怨おんぐんもありません、どうか落ち着いて下さい、人違いをしないで下さい、お願いです」

「黙れ、貴様たちがおれを斬りに来たのでなくて、なんのために季節はずれの今頃ここへ登るか、なんのために夜を徹してこの岩屋へ来る要がある」

「それはまさにそうです、わたしが訊ききたいくらいのもですよ、だが云って見ればそういうまわりあわせになったんですね、わたしは登るのをよそうと云ったんです、二合目で泊ることも……」

「大さん、飯を拵こしらえるよ」

秀之進はそういって、土間の隅にある釜戸かまどのほうへと去った。

「それでもお疑いが晴れないのでしたら」と秀之進のほうを見やりながら大助は云った、
「生国と名を名乗りましょう、二人とも讃岐のくに高松の者で、あれは早水秀之進、わたしは太橋大助といひます、江戸から水戸へこころざしてゆく途中なのです」

「兄上さま、お人違いのようでございます」

「水戸へ、水戸へおいでか」兄のほうは妹の言葉も耳にいらぬようすで、そこへ刀を置き、
にわかには眼を輝かしながら坐り直した、「ああ水戸、拙者にもあこがれの地です、だがもう
行ける望みはない、このとおりのからだですから……そして、水戸へいかれるとすると、お
そらく東湖先生をおたずねなさるのでしようね」

「さあどうなりますか」相手のようすが急に変わったので大助はほつとすると同時に少し気ぬ
けがした、「どうなりますか、おたずねするつもりではいるのですが」

「是非とも、是非ともそうしなくてはいけません、これからの日本の動きの原動力は水戸に
ある、水戸の原動力を燃やすものは東湖先生です、こう云うとおそらくあなたは妄言だとお
思いになるでしょうが、それはあなたがまだ水戸を知らず東湖先生の精神を知っていないか
らです」

男は一瞬まえに激発した昂奮とは別の意味で、一種の偏執狂とも思える情熱に駆られて語
りだした。それはもうごく云い古されたありきたりの説で、なんの新味もなかったし退屈き
わまるものだった。幕府の秕政を鳴らし、尊王を叫び攘夷を唱える、聞く者にとってそれが
退屈であろうと無味乾燥であろうと構わない、そんなことはどちらでもいい、かれはただ自

分で自分の言葉に酔っているだけなのだ。大助はうんざりした、うんざりしながら、それとなく妹のほうを見やった。

藤尾と呼ばれる娘は十七八でもあろうか、眉のきわだつて美しい、陶器のような冷たい白さの肌をした、どこか憂いを湛えた顔つきである。細面のところは兄に似ているが、唇もとの凜として力のある線、人を見るとききの眸子の射止めるような光りは、兄と違って熱狂することを知らない、しずかな、むしろ冷たくさえある理知の質をあらわしている。

——これはなかなかの娘にちがいない、大助は心のなかでそう思った。いったいどういう身の上だろう、武家には相違ないが、こんな所へ兄妹だけで籠っているところをみると、親類とか縁者とかといった者もないのだろうか。

「兄上さまお疲れになります」娘は大助が兄の話聞いていないのを察したのであろう、ちよつと不快そうに眉をひそめながら、そつとすり寄つて兄の肩を抱えた、「どうぞすこし横におなりあそばせ」

そのとき折よく、「大さん飯が出来たよ」秀之進が呼んだので、大助はいいしおに会釈して兄妹のそばから離れた。

熱い味噌雑炊をすすりながら、秀之進は相変らずなにもいわないけれど大助は疲れも飢えも忘れるほど、このふしぎな兄妹のことに心を奪われていた。……岩屋のそとには風雪がたけり狂っていた。引戸の隙間がひゅうひゅうと悲鳴をあげ、時々さつと粉雪さえ舞いこんで来るが、燃えさかる炉の火熱で小屋の中は汗ばむほど暖かかった。……妹は兄をようやく寝

かせ、その枕もとに坐つてじつと顔を見まもっている。すすけた髪、疲労のかけの濃い頬、憂いを刻んだ眉、貧しい木綿物の衣服、大助は絶えずそつちへ眼をやりながら、胸が重くなるほど哀憐の情に駆られた。

——兄のほうはもう長くは生きられないな、かれはひそかにそう思った。もし死んだら、あの娘はいつたいどうするだろう、遺骸いがいの始末、自分の身のふりかたをどうするだろう、いや捨ててはゆけない、かれはさらに心でつぶやいた。これを見捨ててゆくという法はない、早水にもそれはわかる筈はずだ、かれの用務がどんなものか知らないが、この頼りない娘を捨てていつていい道理はない、だって、こんな富士山へ登るような気まぐれをする暇があつたんだからな。

食事が終つて、大助があと始末を済ませると、しかしもう秀之進は出発の支度をしていた。冗談じゃないと大助は思った。おれはでかけはしないぞ……。

「いくぞ、大さん」

秀之進は笠をかぶつてさつきと引戸のそとへ出ていった。大助は娘がじつとこちらを見ているのに気づいた。しかしやはり身支度をして笠を冠かぶり、兄妹のほうへ挨拶をした。

「どうもお邪魔を致しました」

「……この吹雪に」

娘はそう云いかけて口をつぐんだ。その射止めるような、じつと見上げるまなざしが、縫すがりつきたい気持を表白しているもののように大助には思えた。